

変わらぬ風景に気づける幸せ

酒井裕美子さん（昭和 32 年生 茨城県）

「毎回最高の一瞬を期待して、“いつもの風景”に向かう。だから、ワクワクが絶えないの」。

毎月旦那さんの実家である金山町に通いながら、奥会津の写真を撮り貯めている。奥会津には結婚してから何度も足を運んでいるが、その魅力に惹かれていったのは退職してカメラを始めてからだという。

「写真を撮るようになってから、景色を探して出歩くようになった。それまで見えていなかった“美しいもの”が、奥会津にはたくさんあったことに気づかされた」。

季節、光、風、気象条件、運…コンディションが揃わないとなかなか良い写真には至らない。

根気と努力とタイミング、そして情報を駆使して毎回最高の一瞬と向き合うのだ。それでも納得できる写真はシーズンで1枚くらいだという。



【朝げ時】

退職して時間との関係が変わり、地域との関わり方も変わって、目線が変わって見えるものも変わってきた。

「自分自身の体験から、何度もそこへ足を運ばないと見えない景色があることを知った。

写真は、地元の人が知らない奥会津を伝える手段だと思っている」。



【朝靄の野良仕事】

「風景の中の人が好き。写真を見てくれた人の想像が膨らむような、物語性のある写真が撮りたい」。

小さく写り込んだ人からどんどんイメージが広がり、奥会津のありふれた暮らしが物語になって浮かび上がってくる。もしかしたらそこに、人は郷愁を感じるのかもしれない。

誰しものが無意識に思い描くような、懐かしくて愛おしい日本の故郷の風景がそこにある。

そんな奥会津の姿に羨望や期待を込めて、酒井さんはいつもの風景にカメラを向ける。

【秋深まる】

「初めて来た 30 年前と全然変わらない。人はこういうところに来ると、ホッとするんじゃないかな」。

カメラを通して切り取った瞬間が、まだ奥会津を訪れたことのない人の心に響き、感動を起こす。

地元民の何気ない、当たり前の日常が、誰かの特別なワンシーンとなることがある。

厳しい自然環境の中を淡々と、穏やかに流れる奥会津の人々の暮らしが、どこかで誰かの救いとなって、心を癒す効果を含んでいる。酒井さんは、写真を通して確信している。

「それが奥会津の持つ可能性で、これから増々大きくなるのではないかと思う」。

コロナ明けと只見線全線開通を機に、たくさんの人が奥会津に足を運ぶようになった。

奥会津を訪れる人は、何を求め、どんな感動と出逢っているのだろうか。

奥会津を見つめた多様なフィルターその先に、共有できる心地よい未来があるのかもしれない。

